

情報の信頼性の問題をインド哲学から考える

岩崎陽一

一 はじめに

私たちは情報に基づいて意思を決定し、行動している。或いは、情報とは私たちの意思決定や行動に影響を与える諸々の認識の内容である、といってもよいだろう。⁽¹⁾ 広義の情報には知覚等によって得られるものも含まれるが、本稿は狭義の、伝聞によって得られる情報について論じる。以下、「情報」というとき、原則として伝聞情報、およびそれを述べる言語表現を意味するものとする。

情報には正しいものもあれば、誤ったものもある。否応なく情報に依存して活動している私たちにとって、情報の真偽判定はきわめて重要な仕事である。しかし、その判定が困難、或いは不可能な場合もある。それでもなお、私たちは何らかの根拠により特定の情報を正しいものとみなし、つまりそれを「信頼」

し、自らの意思決定に用いることを強いられる。そのとき、情報を信頼するかしないかの判断は、いかなる根拠に基づいて行えばよいのだろうか。

一九九〇年代後半から、理工学系の情報学の研究者らにより、心理学や社会学と関連しつつ、情報の信頼性に関する研究が盛んに進められている。情報の信頼性とは何か、それはどのように評価されるのか、といった問題に関する、理論的および技術的な議論が行われ、一部では情報の信頼性を計算機によって評価しようという試みもなされている。どうしてこの十数年で、これらの議論が急速に深められることになったのだろうか。もちろんその原因には、我々の社会と経済がいわゆる情報社会、知識社会等と呼ばれる局面に至っているということや、情報爆発といわれるような、情報流通量の急激な増加もあるだろう。しかしこれらは過去十余年に始まったことではなく、決定的な

要因とはいいがたい。情報の信頼性をめぐる問題が深刻さを増した最大の原因は、我々が接する情報の、質的な変化にあると考えられる。

ひと昔前までは、情報を信頼するかしないか判断するのは、現在ほど難しくなかった。学者の発言や新聞の記事は信頼できる。出版社には、信頼できる出版社とそうでない出版社がある。こういった判断基準について、或る程度の共通認識があった。インターネットが登場しても、状況はそう変わらない。かつては、政府や大学ドメインの中にあるサイトは信頼できる、Yahoo! からリンクされているサイトは信頼できる、というような認識が存在していた。いずれの場合も、発信者側にいる「ひと」に対する信頼——情報発信者そのひと、または掲載情報やリンク先サイトを選別する検閲者に対する信頼——に根ざした評価が行われている。この状況が本質的に変化するのは、九十年代後半に、CGM（消費者生成メディア。ブログ、Q&A、口コミサイト等）と呼ばれる、不特定多数の発信者によるウェブサイトが流行し、それらが私たちの意志決定において欠かさない情報源となつてからである。そこで得られる匿名性の高い、そして検閲も受けない情報については、右記のような古典的な信頼性評価基準を適用するのが難しい。近年、これらの情報を扱うため、情報の信頼性を、ひと、特に発信者の性質に依存せずに評価する方法がさまざまに検討されている。

一方、インド哲学においても、これと類似する議論が非常に

古い時代からみられる。その議論は、宗教聖典の権威の問題と深く関係する。インド哲学史は、主流派であるバラモン教の他、仏教やジャイナ教を交えた、宗教間の活発な思想交流によつてつくられてきた。これら多宗教が共存する議論空間において、ヴェーダ聖典を信奉するバラモン教哲学の思想家たちは、その聖典の信頼性を論証する必要性に迫られる。インド哲学諸派の中でも、聖典解釈学派と論理学派がこの問題について特に熾烈に議論を闘わせた。聖典に特権的な地位を与える聖典解釈学派に対し、論理学派は、聖典も私たちの日常的な発言も、すべて同列に扱う。その上で、あらゆる伝聞情報の信頼性を、発信者の性質に依拠して評価する。では、発信者を信用してよいか判断できない場合はどうすべきか。後にみる九世紀頃の哲学者、ジャヤンタ・バッタ (Jayanta Bhatta) は、そのような情報の信頼性を評価する方法を検討している。

しかし、これらふたつの領域のアプローチには、注意すべき本質的な差違が存在している。以下、本稿ではそれぞれの議論の一端を概観しつつ、両者の類似性と差異を明らかにし、情報学での議論に対して、インド哲学における古くからの思弁が何を提供できるかを考える。

二 情報学での議論

1 フォットの信頼性概念

情報学でしばしば問題とされるのは、情報の *credibility* とい

う属性である。本稿ではこれを「信頼性」と訳す。情報学における信頼性概念の理解は、スタンフォード説得技術研究所のB J・フォッグが一九九九年以降発表した一連の論文に大きな影響を受けている。フォッグの信頼性論は、次の二点を核としている。まず、信頼性は perceived quality であるとされる。つまり、それは情報ないし情報媒体に自律的に存在するものではなく、受信者により決定される、或いは受信者との相互関係の上になりたつ性質である、と理解できるだろう。そしてその信頼性は、情報の発信者がつふたつの属性、「誠実さ (trustworthiness)」と「専門性 (expertise)」により決定されるといわれる。この概念規定のソースは、古くはアリステレスの弁論術、直接的にはホヴァランドに端を発する社会心理学の説得コミュニケーション論³⁾に遡ることができる。このことから分かるように、フォッグが明らかにしようとしたのはひとつの心の問題、つまりひとがオンラインのどのような情報に信頼性を感じるのかという問題である。

フォッグの研究自体は哲学と深く関係するものではない。しかし、この研究の成果に依拠するかたちで、情報の信頼性を客観的に、できることならば計算機により評価しようとする研究が多くなされている。そしてその種の研究は、後にみるインド哲学の議論と関心を共有しているように思われる。それらの研究の初期のものには、情報の信頼性と真偽を混同するという根本的な誤謬がしばしばみられるが、次に紹介するふたつのプロ

ジェクトは、信頼性と真偽を明確に区別した上で、信頼性の評価を扱うものである。

2 NICTのプロジェクト

NICT(情報通信研究機構)は二〇〇六年から二〇一一年にかけて、「情報の信頼性評価に関する基盤技術の研究開発」というプロジェクトを行った。プロジェクトリーダーである黒橋禎夫によると、情報の信頼性の判断を「計算機で自動化することはきわめて困難であるが、関連する情報の収集と統合を自動化し、人間の判断を支援することは可能である⁴⁾」。彼らはそのような判断支援サービスを開発することを目指している。

NICTの加藤義清らは、信頼性を定義するにあたり、フォッグの分析に言及した後、独自の定義を示している⁵⁾。すなわち、情報の信頼性とは、「ある情報に含まれている内容が真実であるか、どれくらい正確であるかの信念を形成するのに利用される様々な特性」である。そして、以下の四種類の信頼性を挙げる。①「発信者に基づく信頼性」。これは発信者の「意図に対する期待」と「能力に対する期待」により「構成」されるといわれている。それぞれフォッグの言及する「誠実さ」と「専門性」に相当するものと理解できる。②「情報の外観的特徴に基づく信頼性」。分かりやすいレイアウト、誤字脱字の少なさといった性質である。③「情報の評判に基づく信頼性」。発信者の評判ではなく、情報そのものの評判に関するものである。④「情報の意味内容に基づく信頼性」。特定の問題に関する肯定的

見解と否定的見解を集めて提示し、それらを参考に、その問題について述べる情報の信頼性を情報受信者が主体的に判断する、といったことが想定されている。

3 山本のプロジェクト

京都大学の山本祐輔もまた、継続的にウェブ情報の信頼性の研究を行っている⁶⁾。山本は credibility を「信憑性」と訳す。信憑性概念の理解については、基本的にホヴランドとフォッッグの規定に従っている。その信憑性は、複数の「指標」に基づいて「判断」される。指標としては「正確さ」、「客観性」、「権威」、「鮮度」、「詳細性および網羅性」が用いられる。ここでは N I C T の場合と異なり、信憑性は単一の性質であり、それが複数の指標により決定されるといわれている。五つの指標は、図書館情報学において信頼性評価の指標としてしばしば挙げられるものである。ただし、例えば被リンク数によって内容の正確さを測り、また多くのページで同じ内容が言及されていることによりその内容の客観性を測るなど、各指標について独自の解釈がなされており、その名称と実体は必ずしも一致しない。

山本もまた、信憑性の「判断支援」を行うサービスを目指している。山本のウェブサービスは、これらの指標に基づいて検索エンジンの出力結果にスコアを与え、利用者に情報選択の判断資料として提供する。

4 考察

以上ふたつのプロジェクトにおいて評価対象とされている信

頼性は、心理学の記述的研究で規定されたものである。このことからいえるのは、これらのプロジェクトで考えられる「信頼性の高い情報」とは、信頼すべき情報ではなく、情報受信者が実際に信頼することになる情報だということである。しかし、それが私たちの望むものだろうか。真偽の疑わしい情報が溢れる現在、私たちが求めているのは、「多くの人に信頼される情報」ではなく「信頼すべき情報」であろう。情報学の諸研究が結果として一種の信頼性評価ガイドラインを示すことになっているのは、その背景にこのような問題意識が存在しているためと思われる。しかし、適切なガイドラインをつくるために論ずべきは、「どのような情報を私たちが信じるか」という心理記述ではなく、「どのような情報を信じるべきか」という規範である。

これを考えるにあたって、まず、「信頼すべき情報」のもつ信頼性と「信頼される情報」のもつ信頼性を区別する必要があるだろう。後者が情報受信者個人により決定されるものであるのに対し、前者は、情報をもつ、「正しいと期待できる」または「期待してよい」という属性であるといえる。もちろんこれは、情報の真実性そのものではない。或る情報が正しいと保証されなくとも、それを信頼することの適切さが十分に保証される、ということがある。例えば医師の「一週間で熱は引きますよ」という発言について、これが真であることを確実に保証することは、この発言が行われた時点では不可能であるが、そ

の時点でも、これは信じることが推奨される、信頼性の高い情報だといえるだろう。

ふたつのプロジェクトが用いる評価基準のひとつひとつを検討することは行わないが、例えばページのレイアウトや鮮度、網羅性は「正しいと期待できること」と直接の因果関係をもたず、規範として用いるのは難しいといえるだろう。私たちが「正しいと期待できる情報」に導く技術を実現するためには、規範的視点による検討を深める必要がある。そしてそのような規範は、経験科学ではなく、哲学が関心を寄せる対象である。次節では、古くから「情報の信頼性をいかにして評価すべきか」を問うてきたインド哲学の議論を概観し、情報学の議論へ応用する可能性を探る。

三 インド哲学での議論

1 論理学派の伝統的立場—発信者の性質

インドの論理学派は、知識獲得の手段として、知覚、推理、類推、言葉（伝聞）の四種を認める。もちろん、あらゆる言葉が正しい知識を与えてくれるわけではない。言葉には信頼すべきものと、信頼すべきでないものがある。信頼すべき言葉を、論理学派では伝統的に、次のように定義する—「信頼すべき言葉とは、信用すべき人の教示である」。「信用すべき人」と訳した「アーブタ⁽⁹⁾」とは、次のふたつの属性を具えた人物のこととされる。ひとつは、話していることがらを話し手自らが

直接見て知っているということ。これは、その話し手が当該のことがらを何度も経験しているということから推理されるといわれる。それはまさしく、心理学のいうところの「専門性」に相当するものといえるだろう。もうひとつは、自らが経験したとおり、相手に伝えようとする、つまり正直であることである。これは「誠実さ」に相当する。そのような人物の発言は信頼してよい。知覚や妥当な推論と並ぶ、知識のソースとなる。これが論理学派の伝統的立場である。

情報発信者の性質に基づく信頼性評価は、信頼性を考える上での基本となる。しかし、信頼性評価の規範をつくらうとするとき、これだけでは不十分である。発信者を信用してよいか分からぬ情報もまた、私たちの身の回りに溢れているが、それらを扱うことができないためである。論理学派の考えでは、天界等の超自然的なことがらについて神はそれを自ら知っており（専門性）、また神は偽ることがない（誠実さ）とされるので、神が著したヴェーダ聖典は信頼すべきとされる。しかし、「マヌ法典」等の法典類、「マハー・パーラタ」等の叙事詩、異教徒の聖典などの信頼性を考えるときに問題が生じる。これらの典籍もまた、天界や宇宙の真理について述べているが、これらの著者は人間である。我々人間は、天界や宇宙の真理を直接見て知ることができない。したがって、信用成立の要件のうち「専門性」の部分はどうしても満たすことができない。発信者の性質に基づく規範を適用するならば、発信者が信用できると担保

されない以上、これらの文献の情報を信じるべきではない。しかし、バラモン教徒が崇敬する「徳の高い人々(シシュタ)」は、法典を信頼し、その規定を遵守している。彼らの法典に対する信頼は、いかにして擁護されるのか。

2 制限としての受容

論理学派の伝統的な説では、法典類の作者は超自然的な手段(ヨーガ)によって森羅万象を直接見て知っていると考えられる。したがって、その発言の信頼性は、やはり発信者の性質によって一元的に評価することができる。しかし発信者の知覚内容を確かめるすべはない。そうすると、誰でも自由に「われわれの聖典の作者も真理を直知している」と主張し、その信奉する者を「信用できる者」に祭り上げてしまう恐れがある。先述の思想家ジャヤンタは、異教徒がそのような仕方、それぞれの聖典の信頼性を主張する事態を懸念する。

そこで彼は、インドで古くから情報の信頼性評価基準として知られている、受容に基づく評価を導入する。或る情報が「マハージャナ(立派な人たち)或いは「多数派」」により受容されていれば、その発信者は信用できると推定でき、逆にそれがなければ、発信者の信用は推定しがたいとされる。受容をそれ自体で評価基準とするならば、いわゆる権威論証または多数論証の誤謬の典型となってしまう。したがって、インドでも受容による評価はしばしば批判の対象とされる。ジャヤンタもこれを、直接的に情報の信頼性を導くことができる指標とは考え

ない。受容は、発信者に基づく評価の濫用を制限する補助要素として用いられるのみである。

一方、情報学の分野では、受容は非常に頻繁に用いられている。個々のウェブページの受容の度合いが、ウェブ上のリンクという形で計算機により容易に調査できるためである。この基準は、あくまで蓋然的なものという認識の下で利用すれば非難されるべきものではないが、規範として用いるには論理的に問題含みであることが情報学でも認識されなければならない。

3 既知の情報からの派生

ジャヤンタはまた、論理学派の伝統説に加えて、聖典解釈学派の次のような考えを導入する。彼らによれば、法典や叙事詩は、信頼性が既に確立されている情報、つまりヴェーダ聖典に基づいていることを根拠に、信頼に足るものとみなし得る。この主張からは、信頼すべき情報から、正しい手続きを経て派生された二次的な情報も信頼すべきである、という規範が得られる。

もっとも、叙事詩が実際にヴェーダから派生していることを論証することもまた、困難な仕事である。ジャヤンタはこの問題の解決に苦心しているが、情報学においてウェブ情報を扱うだけであれば、この規範を導入できるのではないか。ウェブ情報に関していうと、およそ間違いないと考えられる情報源からの転載や引用は、正しいものとみなせるといことになる。現在の技術をもつてすれば、ウェブページのファイル更新日付と

テキストの照合により、引用元の追跡は或る程度ならば実現可能であろう。

4 整合性

以上、ジャヤンタの言及する信頼性評価基準をみてきた。最後に、ガンゲーシャ (Gangesa) という、十四世紀の論理学者の見解を紹介しよう⁽⁶⁾。彼は、発信者の性質に基づく評価を忌避する。その点において、彼の立場はそれ以前の論理学派の説と根本的に異なる。ガンゲーシャは、鸚鵡が人間の言葉を真似て喋った言葉や、詐欺師が事実を誤認していて間違えて本当のことをいってしまったときの言葉、どちらも偶然に事実を言い当てている場合のものだが、それらをも知識のソースとして扱おうとする。もちろん、私たちの常識からすると、鸚鵡の発話はまったく信頼の置けるものではない。しかし、例えば鸚鵡が「コンニャクゼリーを食べれば痩せますよ」と声真似するとき、それを聞いてコンニャクゼリーを主体とする食事に変えれば、実際に痩せるひともいるだろう。この情報も、信頼される情報ではないが、信頼してもよい情報といえよう。

ネット上には、それこそ鸚鵡なみに、その知識レベルも意図も分からない発信者による情報が氾濫している。さらには、意識をもたないロボットが自動的にオンライン情報を回収し、再編成し、ブログ記事として公開しているものもある。こういった情報をすべて、信頼するに足らないゴミとして切り捨ててしまふこともできるだろう。しかし、適切な規範に従えば、その

中から正しい情報を探し出し、それにより知識を得ることもできるのではないか。

ガンゲーシャは、情報の信頼性評価に際してもはや発信者を調べることはなく、「それを否定する既知の情報が存在しないこと (bādhakapamāhāva)」という一元的な指標よって評価を行う。一種の整合性と呼ぶことができるだろう。NICITの用いる第四の評価方法は、これのひとつの実装といえる。

また、この指標に類するものとして、十・十一世紀のウダヤナ (Udayana) は、「既知の情報との整合 (pramañāntara-samvāda)」という評価基準を示している。両者には大きな違いがあり、ウダヤナは整合性を積極的に信頼の条件として求めるのに対し、ガンゲーシャの見解は、特に矛盾が存在しないならば信頼してよいという規範として理解できる。どちらが適切な規範となるか、西洋哲学における証言 (testimony) の還元主義と非還元主義の論争も参照しながら検討する必要があるだろう。

四 結論と展望

インド哲学の思想家たちが生きた時代、新宗教や異端が乱立し、それぞれが真偽の不確かな言説を繰り広げていく状況において、宗教的権威の擁護を目的として、何を信じてよく、何を信じてはいけないかを区別する規範が求められた。情報学の研究者らが問題視する現代の状況にも、それと似通ったところが

ある。ウェブという新しい情報媒体で、真偽の確かめようがない情報が無限に行き交う。その中で怪しい情報を排除し、正しいと考えられる情報のみを選び出すとすると、情報学は、情報選別のための規範の問題に入り込まざるを得ない。本稿では、およそこれまで結び付けて考えられることのなかったインド哲学と情報学が関心を共有していること、また情報学の扱う現代の問題についてインド哲学から多くの示唆が得られることを述べてきた。

なお、インド哲学で論じられている対象が宗教聖典であるということは本質的ではない。先述のとおり、論理学派は聖典の記述とその他の情報を信頼性の点では区別せずに扱う。彼らが設ける区別は、情報の意味または結果 (antta) —— ここでは真偽と読み替えられるだろう⁽¹⁶⁾ が経験的に判定可能か否かという点のみである。聖典から得られる情報は真偽を判定できないものの代表例であるが、これまでみてきた議論は、同じく真偽が判定できない天気予報や科学的仮説、芸能人のゴシップ等にも適用できる。

インド哲学と情報学における信頼性概念のひとつの大きな違いとして、後者のみにみられる、信頼性を数値で表すという考え方がある。インド哲学では、情報は信頼すべきかすべきでないかのいずれかであり、「やや信頼すべき」というような発想はない。情報学よりインド哲学の方が、デジタル指向である。これは恐らく、インド哲学においては情報の真偽と信頼性が明

確に区別されないことに原因があるのだろう。インドの思想家たちは、真偽判定がそもそも不可能な諸々の情報の真偽を語ろうとしていると思われる。真偽を扱うのであれば、真か偽かの二分法しかない。しかしその判定が不可能である以上、どうしても、正しいだろうという見込み、信頼性しか語り得ない。その結果として、インド哲学は、真偽判定ではなく信頼性評価に関する豊かな議論を生み出すことになったといえる。信頼性に度合いが存在するか、という問題はさらなる検討を要する。信頼性を度合いで考えると、それは蓋然性と非常に近い概念になると思われるが、信頼性と蓋然性の区別については、欧米の認識論でも議論が行われている。本稿は情報の信頼性の問題について、情報学と哲学の対話を始める端緒を開くものであり、具体的な諸問題については、今後東西の哲学と情報学の成果を踏まえて検討していきたい。

- (1) 「情報」概念の多面性と、そのさまざまな定義については、「岩波哲学・思想辞典」(岩波書店、一九九八年)「情報」の項、および劉継生・木村富美子「はじめて学ぶ情報社会」(昭和堂、二〇一二年)一、一一頁等。
- (2) BJ Fogg and Hsiang Tseng, 'The Elements of Computer Credibility, Proceedings of the SIGCHI Conference on Human Factors in Computing Systems, Vol. 1999, pp. 80-87, 1999 等を参照。
- (3) C.I. Howland et al., *Communication and Persuasion*, Yale University Press, 1953. (C・I・ホウランド、辻正三・今井省吾訳『プロパガンダと説得』誠信書房、一九六〇年)。

- (4) 黒橋禎夫他「情報分析システム WISDOM—Webの健全な利活用を目指して—」〈http://ke.nict.go.jp/project/WISDOM_TR.pdf〉 二〇一〇年 三頁。
- (5) 同前、一五—二二頁。
- (6) 山本祐輔・田中克己「ウェブ検索結果の信憑性判断支援」〈<http://honolab.org/download/WebDB2010.pdf>〉 二〇一〇年を主に参照したが、山本は他にも多数の関連論文を発表している。
- (7) 山本が用いる五つの指標の適切さを論じるには、図書館情報学の研究を検討する必要があるが、本稿ではそこまで踏み入らない。
- (8) *Nyayasutra* (ed. A. Thakur, 1997, 以下 NS) 1.1.7: *āpiopadesah śabdah/*
- (9) *Nyāybhāṣya* (ed. A. Thakur 1997) p.14, 4.
- (10) 拙稿「*Tattvachintamani*における言葉の妥当性の根拠と確定方法」『インド哲学仏教学研究』一七号、二〇一〇年、四一—五五頁を参照。
- (11) *Nyāyamañjarī* (ed. K. Karaka, 2004, 以下 NM) p.207.
- (12) 本節で言及するジャヤンタの議論の詳細については、丸井浩「宗教伝統の権威論証とインド哲学：護教論理と寛容精神」『同志社大学二一世紀COEプログラム 一 神教の学際的研究 文明の共存と安全保障の視点から 二〇〇六年度研究成果報告書』二〇〇七年を参照。
- (13) NM, p.197.
- (14) NM, p.203.
- (15) 本段落の詳細については、前掲拙稿を参照。
- (16) NS 1.1.8: *sa dviśiḥo dīśādīśārthavā/*「それ(言葉)は、意味・結果が経験可能なものと経験可能でないもの〔の区別〕に従って二種である。」

(いわずき・よういち、インド哲学、東京大学大学院)